



Title	装飾的紐結び「花結び」にみる価値創造：橋田正園氏および田中年子氏の活動軌跡を中心に
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103733
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

装飾的紐結び「花結び」にみる価値創造

— 橋田正園氏および田中年子氏の活動軌跡を中心に

矢島 由佳 大阪大学大学院在学

はじめに

民俗芸術は、国家の関与を通じて形成され、国民意識に影響を与えてきた。人間の技芸の一つである結ぶという行為は、世界中で見られ、日にちやお金を数える等の実用的目的のほか、生活を彩るための装飾的目的でも用いられてきた。本研究は、広義には民族芸術に分類される「花結び」として知られる日本の装飾的紐結びの価値が、茶道と相まってどのように築かれてきたのかを探るものである。まず、花結びの定義について確認しておきたい。花結びについて、『日本国語大辞典』は「花形に結んだ紐結びの総称。三つ輪結び、梅結び、菊結び、玉房結びなどがある。これらは装飾として単独にも使われたが、また被布などの入紐としても使われた。また、細い紐を種々の花形に結ぶ女子の遊び。女子の諸芸の一つとされた」と定義する。さらに、花結びは包結研究家の額田巖(1911-1993)により、茶道や香道の系譜に位置付けられて紹介されてきた経緯も手伝い、伝統文化の一つとして認識されてきたと考えられる。

だが、こうした装飾的な紐結びは、日本に特有のものではなく、他国においても「伝統文化」として継承されてきたものでもある。装飾的紐結びは、「紐」という共通の素材を用い、東アジアに広く共有される技法に基づきながらも、それぞれの地域で異なる様式や用途が発展してきた。その結果、各国において独自の文化的背景のもとに価値づけられ、「伝統文化」として継承されてきた。1970年代から1980年代にかけて、日本、韓国、台湾では装飾的紐結びの再評価がほぼ同時期にみら

れた。

これを牽引したのは、日本の橋田正園氏(1923-1991)および田中年子氏(1941年生)、韓国の金喜鎮氏(1934-2021)、台湾の陳夏生氏(1939年生)である。特筆すべきは、韓国および台湾では、装飾的紐結びの技能保持者を無形文化財に認定し、政府がその地位を保障してきた点であり、韓国の金喜鎮氏は1976年、台湾の陳夏生氏は2022年に無形文化財に認定されている。一方、日本では装飾的紐結びの技能保持者に対する国家的な保護や活用はなく、重要無形文化財としての認定も行われていない。

このように日本、韓国、台湾における装飾的紐結びの伝承に対する国家の関与には顕著な違いがあるのは明白であるが、東アジアにおける装飾的紐結びの価値醸成の比較文化研究は管見の限り、これまで行われていない。したがって、東アジアにおける装飾的紐結びの比較文化研究を今後行っていくことを念頭におき、本発表は、橋田正園氏および田中年子氏の活動に注目し、とりわけ花結びがどのように価値づけられてきたのかを明らかにすることを試みるものである。

構成については、まず、韓国および台湾でどのように日本の結びが認識されているのかについて述べる。それを踏まえた上で、花結びが橋田正園氏および田中年子氏の活動軌跡について述べるほか、裏千家との関わりや展示を通じて花結びに関する言説がどのように構築されてきたのかを考察していく。

韓国および台湾における「日本の結び」についての認識

花結びは「日本の伝統文化」として紹介されることが多い。だが、「日本らしさ」や「伝統」とは、他者との比較や異文化との交差の中で初めて明確になる相対的かつ動的な概念であると考えられる。そこで、花結びの価値がどのように創造されたのかを考えるにあたり有効な手掛かりとなるのは、外からの眼差しに着眼することである。具体的には、韓国および台湾では政府主導による装飾的紐結びの保護および活用が行われており、公的機関が出版した書籍において、日本の結び、韓国の結び、中国の結びについての記述がある。

そこで韓国および台湾の行政機関における日本の結びに関する記述を考察した。その結果、両者に共通して確認できるのは、水引に加え、茶道で用いられる結びが言及されている点が明らかになった。なお、本研究は素材を紐に限定して論じるため、水引を考察対象とせず、紐結びについての考察を進めることを断っておきたい。ここで注目されるのは、韓国および台湾の双方において、日本の紐結びとして共通に認識されているのが、茶道で用いられる仕覆に施される「花結び」である、という点である。では、この花結びが茶道と結びつけられて語られる言説は、どのように日本において形成されてきたのであろうか。

『玉のあそび』にみる花結び技法の復興と茶道

1980年代以降、カルチャーセンター等で女性が花結びを楽しむようになったことを経て、花結びは主に女性の行う趣味の一領域として確立されていった。では、花結びが女性の趣味として伝承されていく過程でどのように茶道と結びつけられて理解されていったのであろうか。拙稿「1970年代後半から1980年代にみる花結びの伝承」『デザイン理論 85号』で示したとおり、花結びが女性の趣味として伝承されていくようになった端緒として、雄川丘甫が著した『玉のあそび』（寛政

18;1801）に記載された結び図を橋田氏が実際に紐で結んで復元した取り組みが1980年に朝日新聞で取り上げられ、花結びがその後注目されるに至った。他方、前述の論文で十分に言及できなかった点として、橋田氏がどのような経緯で『玉のあそび』と出会い、復元するに至ったのかという背景が挙げられる。その点について、調査を行い、「橋田氏は石州流での茶道の学びを進める中、仕覆に結ぶ長緒結びに関心を持ちながら、師匠に従って茶道に邁進し、1963年に『玉のあそび』に出会った。そして、橋田氏が茶道のさらなる精進ではなく、『玉のあそび』に記された結びの復元に本格的に取り組もうとしていた時期に、田中氏が橋田氏を師として茶道を学ぶようになった」ということを明らかにした。

加えて、花結びの文化的価値が構築されてきた経緯について、橋田氏および田中氏のいずれかから、一度は花結びを学んだ人物が著した書籍等についても分析を行い、花結びに関する書籍等の刊行に際して、裏千家との関わりが見られることも示した。

以上を踏まえると、日本の装飾的紐結びである花結びが茶道の文脈で広く理解されるようになった端緒は、『玉のあそび』にみられる茶道で用いる結びの復元にあったといえる。さらに、これらの結びは特定の流派に限定されて用いられていたものではなかったため、茶道諸流派を超えて好意的に受け入れられた側面がある。すなわち、『玉のあそび』にみる結びの復元が、茶道と花結びとを結び付けて語る出発点となり、その後、出版物を通じて両者の関係が繰り返し語られるようになった。このことから、花結びの価値創造の過程の一端が明らかになったといえよう。